

Orchestral Works #1



Composed by Hiroshi Tamawari

自作解題

Orchestral Works #1

Composed by Hiroshi Tamawari

- 01 The Cavalry - 騎兵隊
- 02 Perpetuum Mobile for Orchestra - 管弦楽のための常動曲
- 03 Toccata for Electric Guitar, Electronic Instruments and Orchestra
- 電気ギター、電子楽器と管弦楽のためのトッカータ
- 04 Song without Words - 無言歌
- 05 Rhapsody for Orchestra - 管弦楽のための狂詩曲
- 06 Joy to the World (Arrange) - もろびとこぞりて
- 07 Capriccio based on "Deck the Halls" - 「ひいらぎかざろう」による綺想曲
- 08 Variations, Fuga and March based on "Ah! Vous dirais-je, Maman"
- 「きらきらぼし」による変奏曲、フーガと行進曲
- 09 Soran-bushi (Arrange) - ソーラン節
Three Paraphrases based on Children's Song of Japan
- わらべうたによる3つのパラフレーズ
- 10 I Takenoko-ippon - たけのこいっぽん
- 11 II Toryanse - とおりゃんせ
- 12 III Rakan-san - らかんさん

目次

まえがき	4
1. 騎兵隊	5
2. 管弦楽のための常動曲.....	6
3. 電気ギター、電子楽器と管弦楽のためのトッカータ	7
4. 無言歌	8
5. 管弦楽のための狂詩曲.....	9
6. もろびとこぞりて	10
7. 「ひいらぎかざろう」による綺想曲	11
8. 「きらきらぼし」による変奏曲、フーガと行進曲.....	12
9. ソーラン節.....	13
10-12. わらべうたによる3つのパラフレーズ.....	14

まえがき

「管弦楽作品集」とは銘打ってはいますが、コンピュータのみで制作した音楽なので、これを「管弦楽作品」と呼んでよいのかはよくわかりません。けれども、管弦楽を想定して書いたものではあるので、この表題としました。

また、このアルバムは、コンセプト・アルバムではなく、私が今まで作ってきた曲の寄せ集めというもので、ベスト盤ということでもありません。学生時代に作ったものから比較的最近に作ったものまでが混在しています。それらは主に次の3つに区分できます。すなわち、デモ用に作ったもの、習作として作ったもの（なにかの模倣や実験を行ったもの）、気晴らしとして作ったものです。

そのようなものをなぜアルバムとしてまとめたのかというと、これはまったく私的な都合でありまして、新しく導入したソフトウェア音源を試奏させ、その使い方を探り、そのテンプレートを作るということが主眼なのです。新しい音源を使いこなしていくには、いろいろな曲調のものを演奏させ、どのように制御するとどのような演奏となるのかを把握する必要があります。その事情は、ギターやピアノなどの一般的な楽器と同じで、きちんと稽古をしないことにはうまくは弾けないということです。

その残骸をここにお披露目するということはとても忍びないことなのですが、新譜もなしに M3 に参加することのほうがよほど忍びないと思ひまして、この副産物たちをアルバムとしてまとめることにしました。

そのような事情によるアルバムではありますが、ミキシング、マスタリングなど、抜かりなく施しておりますので、それなりの品質のものにはなっているかと思ひます。不慣れな音源による制作とはいえ、むしろ、時間をかけ過ぎた感が否めません。

また、このアルバムを別の面から見ると、その楽曲群は私の音楽的なルーツを辿るものとなっています。制作年代を古いものから順に並べると、10-12. わらべうたによる… 5. 狂詩曲 8. 「きらきらぼし」による… 4. 無言歌 9. ソーラン節 6. もろびとこぞりて 1. 騎兵隊 2. 常動曲 3. トッカータ 7. 「ひいらぎかざろう」…となりますので、その順に聴いてみても面白いかもしれません。

田廻弘志

1. 騎兵隊

- The Cavalry

作曲：田廻弘志 Composed by Hiroshi Tamawari

楽曲について

デモ曲として作ったもので、NHKの大河ドラマのテーマ曲のようなものというコンセプトの楽曲です。これを作った頃には、たしか、武田信玄のドラマが放映されていて、その騎馬隊の進軍の様子をイメージして作ったような気がします。そういうわけで、この「騎兵隊」は欧米の騎士団ではなく、日本の戦国時代の騎馬武者たちのイメージです。

大河ドラマのテーマ曲はたいてい3分きっかりに作ってあるようで、この曲も3分きっかりで終わるようにしてあります。また、戦国時代のドラマによくある妻との恋愛、あるいは愛情に関係するようなシーン向けの間奏部も備えています。

2. 管弦楽のための常動曲

- Perpetuum Mobile for Orchestra

作曲：田廻弘志 Composed by Hiroshi Tamawari

楽曲について

この曲もまたデモ曲として作ったものですが、特になにかをイメージするでもなく、行き当たりばったりで作ったような記憶があります。そういうわけで、この曲には、私自身の個人的な好みの要素が多く混入されています。それは、たとえば、民族音楽風の旋律、変拍子、ポリリズム、オスティナート（同じフレーズの執拗な繰り返し）といった要素です。

タイトルの "Perpetuum Mobile" は「永久機関」という意味のラテン語ですが、クラシック音楽では終始休むことなく速い旋律を延々に連ねた楽曲のことを指したり、そのような楽曲のタイトルとしたりします。日本語に翻訳するときは、「常動曲」とか「無窮動」とかと訳されるのが通例のようです。

この曲もほとんど休みがなく、次から次へと楽想が切り替わっていくので、「常動曲」としましたが、果たしてこの曲が伝統的な常動曲と呼べるものかどうかはよくわかりません。

3. 電気ギター、電子楽器と管弦楽のためのトッカータ

- Toccata for Electric Guitar, Electronic Instruments and Orchestra

作曲：田廻弘志 Composed by Hiroshi Tamawari

楽曲について

この曲もデモ曲として作ったもので、近年のハリウッドの映画音楽によくある異常なほどに緊迫したシーン（それはおそろくなにかを追跡したり、なにかと戦っていたりするもの）をイメージしたものです。「トッカータ」というタイトルをつけましたが、「なんとなくつけたタイトルです」という意味合いでしかありません。

管弦楽とテクノ的な電子ドラムの組み合わせは、映像に付随する音楽の中では、よく使われる手法ではありますが、このような高速のバスドラムのリズムは、コンサート等での実演には適さないのかもしれませんが。ドラムパートをスピーカーで再生し、クリック音を聴きながら指揮者がタクトを振れば、演奏そのものは可能でしょう。けれども、そうした実演では、スピーカーから再生されたドラムの音に対しても、コンサートホールの残響が加わることになります。このような高速のバスドラムの連打に対して、コンサートホールの豊かな残響が加わってしまえば、音の輪郭がぼやけ、心地の良い音像にはならないような気がします。

オーケストラには豊かな残響があるけれども、ドラムパートだけは残響があまりないというような音像は、録音物の中だけに存在できる奇妙な音でして、よく考えると不思議な音なのです。ライブ演奏における表現と録音物における表現との間には、本質的に異なる違いがあるような気がします。

4. 無言歌

- Song without Words

作曲：田廻弘志 Composed by Hiroshi Tamawari

楽曲について

この楽曲は習作として、ディズニー風のオーケストラを伴う歌曲を作ろうとしたものです。そのオーケストラは小編成であり、緻密な編曲がなされ、また、その歌はオペラ的な歌唱ではなくポップス寄りの歌い方をする…そのようなものを作ろうとしています。

タイトルを「無言歌」としていますが、ほんとうのところを言うと最初から無言歌として作ろうとしたものではありません。当初は、女声の独唱曲を企図したものでして、実際、女声の声域の中に「歌」の旋律はあります。森の中になにか感傷的で抒情的ものを歌い上げるというイメージで作ったのですが、この旋律に当てはまる歌詞がどうにも思いつかないのです。

なんらかの劇の劇中歌ということであれば、なにかしらの歌詞を当てることができるかもしれません。けれども、その劇中歌を単独で取り出してしまえば、その文脈がわからず、不完全な歌詞内容になりますから、単独曲としては成立できません。かといって、ボーカリーズにするというのもなにか不自然で、この「歌」は明らかになにか「言葉」を語るイメージなのです。

今回は、その「歌」をケルトの笛に担当させていますが、特段、ケルトの笛である必要もなく、別の独奏楽器でもよさそうにも思います。けれども、ケルトの笛が旋律をとることで、「森」のイメージや神秘的な雰囲気というのはいまうまく醸し出せた気がします。

5. 管弦樂のための狂詩曲

- Rhapsody for Orchestra

作曲：田廻弘志 Composed by Hiroshi Tamawari

楽曲について

この楽曲も習作と言えるもので、20年近くも昔に、映画音楽のような何かを作ろうとしたものです。私の記憶が確かならば、「風とともに去りぬ」の「タラのテーマ」のようなものを作ろうとしていた気がします。近年の映画音楽というよりも、往年の映画音楽の模倣をしようとしたものではあるのですが、途中でそれはどうでもよくなったらしく、なにかSF映画のような緊迫したシーンのような音楽が混ざり込んでいます。

改めて、その演奏データと向き合くと、ところどころ不協和音が混ざっていたり、オーケストレーションに無理のある箇所があったりして、「作り方が雑だな」と感じ入りました。また、当時はそこまで和声を支配しきれていなかったのだとも思います。もちろん、そのような箇所は、今回の版では修正してあります。

6. もろびとこぞりて

- Joy to the World (Arrange)

作曲者不詳 Composer unknown 編曲：田廻弘志 Arranged by Hiroshi Tamawari

原曲について

クリスマス・キャロルとして有名な歌で、日本では「もろびとこぞりて」としてよく知られています。「もろびとこぞりて（諸人こぞりて）」は「Hark the glad sound」というドイツ語詞の訳詞で、英語圏でよく歌われる「Joy to the World」の英詞の訳詞は「たみみなよろこべ（民皆喜べ）」という別バージョンの訳詞があるようです。

「もろびとこぞりて」の作曲者は、オラトリオ「メサイア」の作曲者であるヘンデルとされることがあるのですが、調べてみるにどうやらヘンデルとするには少し無理があるようなのです。

「もろびとこぞりて」をヘンデル作曲とする根拠は、オラトリオ「メサイア」の中に、「もろびとこぞりて」の冒頭部分に似た旋律を歌う箇所があることと、「もろびとこぞりて」の英語詞に含まれる「And heaven and nature sing」という歌詞を連呼して歌う箇所があること、の2点とされています。けれども、その2つの要素は同じ1曲の中にあるわけではなく、「メサイア」を構成するたくさんの歌曲の中のそれぞれ別の場所にあるのです。また、その箇所を聴いてみても、「他人の空似」としか言いようがない印象を私は持ったので、この曲の作曲者は、作曲者不詳とさせて頂きました。しかし、それが現代において、盗作疑惑訴訟という形で争われたとしたら、どのような判決を司法が下すのか、私には想像もつきません。

楽曲について

この編曲は、気晴らしのために作られたもので、勢いのままに深く考えずに作ったような記憶があります。終始やかましいほどにエネルギーであるのは、なにかの憂さを晴らそうとしたのでしょう。

7. 「ひいらぎかざろう」による綺想曲

- Capriccio based on “Deck the Halls”

作曲：田廻弘志 Composed by Hiroshi Tamawari

原曲について

「ひいらぎかざろう」もまたクリスマス・キャロルとして有名な曲です。原曲は“Nos galan（大晦日）”というイギリスのウェールズの民謡で、その替え歌が“Deck the Halls”ということのようです。原曲の歌詞、あるいは広く流布している日本語の歌詞にある「ファラララ」というスキヤットのような部分が印象的ですが、この歌詞は日本でいうところの囃子言葉のようなものであるそうです。

楽曲について

「もろびとこぞりて」に続く、クリスマス・キャロル、オーケストラ編曲の第二弾として作りましたが、編曲の域を少し超えている感じがするので、作曲ということにしておきました。この曲もまた気晴らしで作ったものです。

旋律の全部、あるいは断片がさまざまな形に変奏し、中間部には本格的なフーガまで備えているという無駄に込み入った内容になっています。歌ものばかりを作っていた反動で器楽曲らしい、歌らしくない要素を思う存分に味わいたかったのだらうと思います。

8. 「きらきらぼし」による変奏曲、フーガと行進曲 - Variations, Fuga and March based on “Ah! Vous dirais-je, Maman”

作曲：田廻弘志 Composed by Hiroshi Tamawari

原曲について

「きらきらぼし」による…という日本語のタイトルにしましたが、その原曲はフランスの古いシャンソンである“Ah! Vous dirais-je, Maman”という曲で、日本語に訳すと「ねえ、ママ、聞いて頂戴」というような意味になります。娘が母親に自分の恋について語るという内容の歌詞なのですが、一般的な女子というものは、母親と恋の話などをするものなのか、男である私にはよくわかりません。作詞者も作曲者もいずれも不詳の曲のようです。

一般に広く流布している「Twinkle twinkle little star」の歌詞は、イギリスの詩人、Jane Taylorの英語詩“The Star”を引用したもので、どうもそれは、特段、“Ah! Vous dirais-je, Maman”の旋律に当てて書かれた歌詞ということではなく、純粹な詩として書かれたもののようです。“The Star”の詩が“Ah! Vous dirais-je, Maman”の旋律にぴったりとはまるということを誰かが発見し、それが定着していった、ということなのでしょう。

“Deck the Halls”もそうですが、本来の歌とは別に替え歌のほうが広く親しまれる旋律というのは、なにか不思議な魅力を持つものが少なくありません。「きらきらぼし」の旋律は極めて単純であるがゆえに、極めて印象的です。

楽曲について

この曲もまた習作とも言えるもので、変奏曲という形式の中でいろいろな音の重ね方を試したものです。10年以上も昔に作ったものでして、発表するつもりもなく、Roland社のSC-88 Proという極めて古いハードウェアの音源で作っていた気がします。記憶が曖昧なのですが、そのときは、オーケストラ編成とはいえ1管編成というお手軽な編成で作っていたような気がします。

それからしばらくののち、なんらかの形でこの曲を発表したいと思い、ソフトウェア音源を使って2管編成に書き改めたものを作っています。しかし、仕上げにまでは至らず、再びお蔵入りとなりました。当時所持していた音源の表現力では、どうにもうまく表現できない箇所があり、発表していいのかどうか迷っていたんだと思います。

明らかに嘘の音色であれば、多少、表現がおかしくとも、そんなもんだらうと

気にしないという面があります。けれど、それなりにリアルな音で再生してしまうと、実際のオーケストラの響きとの違いがむしろ逆に意識されるようになり、しっくりこないのです。音源にもまた「不気味の谷」と呼ばれる現象があるのかもしれませんが。

そのような事情でお蔵入りとなっていた曲だったのですが、新しい音源の導入によってついに日の目を見ることになりました。

9. ソーラン節

- Soran-bushi (Arrange)

北海道民謡 Traditional folk song 編曲：田廻弘志 Arranged by Hiroshi Tamawari

歌詞について

日本を代表する民謡の1つで、ニシン漁を題材にした威勢のよい歌です。

へ ヤーレン ソーラン ソーラン ソーラン

ソーラン ソーラン (ハイハイ)

鯨来たかと鵜に問えば 私や立つ鳥 波に聞け チョイ

ヤサ エーエンヤーサーノドッコイショ (ハードッコイショードッコイショ)

楽曲について

気晴らしに作ったもので1日ぐらいで作った気がします。なので、作りはいろいろと雑ですが、勢いがある自分では気に入っています。短すぎる曲なので、なにか足してもう少しきちんとしたほうがよい気もするのですが、その手間をかけるほどの愛着はなく、これはこれでいいじゃないか、と思う程度のものであります。終始、騒々しい感じなので「騒乱節」と名付けていた時期もありました。概ね、なにかの憂さを晴らしたいときになにも考えずに作ると、騒々しい感じになることが多いような気がします。

10-12. わらべうたによる 3つのパラフレーズ

- Three Paraphrases based on Children's Song of Japan

作曲：田廻弘志 Composed by Hiroshi Tamawari

原曲について

3つの楽章からなる組曲で、各楽章はそれぞれ、「たけのこいっぽん」、「とうりゃんせ」、「らかんさん」の旋律をモチーフにしています。歌詞にはさまざまなバリエーションがありますが、概ね、次のような歌詞で歌われます。いずれも複数人で遊ぶ、遊び歌です。

I たけのこいっぽん Takenoko-Ippon

へ たけのこ一本お呉れ まだ芽が出ないよ
たけのこ一本お呉れ もう芽が出たよ

II とおりゃんせ Toryanse

へ 通りゃんせ 通りゃんせ
ここはどこ細道じゃ 天神さまの細道じゃ
ちっと通して下しゃんせ 御用のないもの通しゃせぬ
この子の七つのお祝いに お札を納めに参ります
行きはよいよい 帰りはこわい こわいながらも通りゃんせ 通りゃんせ

III らかんさん Rakan-san

へ 羅漢さんが揃ったら回そじゃないか
ヨイヤサノヨイヤサ ヨイヤサノヨイヤサ

「羅漢さん」という部分は少し説明が要るかもしれません。「羅漢」は仏教用語で「尊敬に受けるに値する者」を意味するサンスクリット語の音訳である「阿羅漢（あらかん）」を略した言い回しです。わらべうたにそのような難解な仏教用語が入り込むのは不思議な感じもしますが、おそらくここでいう羅漢とは、仏像として作られ奉じられている羅漢像、とりわけ五百羅漢像のことなのではないでしょうか。五百羅漢とは、シッダールタ（釈迦）に生涯付き添った弟子たちのことを指し、後世には五百羅漢それ自体を奉じるようになります。五百羅漢像は、いろいろな姿の像をたくさん並べたもので、庶民的な親しみやすい姿かたちをしています。この歌の一般的な遊びかたは、「羅漢さんが揃ったら回

そじゃないか」で各自が好きなポーズをとり、「ヨイヤサノヨイヤサ」の掛け声とともに各人が各人の隣の人のポーズを真似ていくというものです。

ただし、私がこの曲を作った当時は、「らかんさん」は「落下傘の親戚か？」ぐらいの認識しかありませんでしたが。

楽曲について

この曲もまた習作なのですけれど、これはほんとうの意味での習作で、10代の頃に作ったピアノ曲が元になっています。ピアノ曲とはいえ、自分はピアノが弾けないので、YAMAHA社のQX3というハードウェアのシーケンサーを使って作曲していたような気がします。

この曲には、ところどころ不協和音が入り交じりますが、習作がゆえに、やたらと丁寧に和音を探し当てていたようで、楽譜を見直してみても、「こういう和声は今は思いつかない」という箇所が何箇所もあります。今いちど、そのような（知らないがゆえの）自由さを振り返ろうという思いから、オーケストラ編成に編み直したのがこの楽曲になります。

日本の作曲家、別宮貞雄のピアノ曲に、「南日本民謡による三つのパラフレーズ」という曲がありまして、そういう曲を作ってみたいと思って作った曲だったと思います。クラシック音楽における「パラフレーズ」とは、原曲を編曲とか変奏という以上に改変していくスタイルの曲のことです。

TAMAWARI MUSICAL OFFICE
田廻音楽事務所

2016年10月30日発行
発行所：田廻音楽事務所
<http://tama-music.com/>
発行人&著者：tamachang

© Copyright 2016 Hiroshi Tamawari All Rights Reserved.